聖　書：コリント人への手紙第二 3：1〜6
説教題：新しい契約に仕える者
日　時：2024 年 10 月 13 日（朝拝）

前回の 2 章 14 節からパウロの本格的な使徒としての弁明が始まりました。弁明と言っても個人的な名誉のための弁明ではありません。これは福音のための弁明です。コリントにはパウロを批判して使徒として認めない人々がいました。それを放置することはパウロ個人だけでなく、彼が伝えた福音までもが捨てられることを意味します。ですからパウロは無視できないのです。彼はこの手紙で使徒とはどういうものであるかを語って行きます。そしてパウロが伝えた福音をコリント人たちがもう一度良く受け止め、その祝福に生きる者となることを願っています。

今日の 3 章 1 節は「私たちは、またもや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々のように、あなたがたに宛てた推薦状とか、あなたがたからの推薦状とかが、私たちに必要なのでしょうか」と始まります。すでに穏やかではない雰囲気が漂っていますね。パウロはまた自分で自分を推薦するのか！そのように言う人たちがいたのでしょうか。一方、パウロが他者からの推薦状を持っていないことを取り上げて批判する人たちもいたようです。どうやらその人々は自分たちは推薦状を持っていると誇っていたようです。それに対してパウロはコリントに来た時、そういうものは持っていなかった。彼は自分で自分を推薦し、持ち上げるようなことは言うが、他人からの信頼できる推薦状は持っていない。そんな彼など信用できるか！と見る人たちがいたのでしょう。

そんなコリント人たちにパウロは、そんな推薦状が必要なのでしょうか？と問います。そのニュアンスは、必要ないということです。パウロはこの問いにどう答えるのでしょう。2 節で彼は「私たちの推薦状はあなたがたです」と言います。コリント教会の存在そのものがパウロの推薦状にあたる、と。コリント教会はパウロの第二次伝道旅行で設立された教会です。パウロたちの働きの実です。コリント人たちがパウロたちから福音を聞いて主を信じ、こうして信仰に立っていること自体、パウロの使徒性を証明する推薦状だと彼は言うのです。彼は先の第一の手紙 9 章 1〜2 節でも次のように言っていました。「私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実

ではありませんか。たとえ私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。あなたがたは、私が主にあって使徒であることの証印です。」

その推薦状は「私たちの心に書き記されて」いるとパウロは言います。これは当時、推薦状を受けた人は、それを持ち歩いていたことを念頭に置いた言葉のようです。パウロたちもそれを持ち歩いている。それは自分たちの心に書き記されている。これはコリント人たちのことをいつも心に覚えているというパウロの彼らに対する愛と献身の証しです。彼らの間で主にあって働き、コリント教会を建て上げることができたことをパウロはいつも心に覚えているというのです。そのコリント教会という推薦状はいつも私たちの心にあるというのです。

またそれは「すべての人に知られ、また読まれています」とも言われています。コリント教会がパウロたちの働きによって誕生し、存在していることは、皆に知られています。ある人たちが持つ推薦状は、その人たちのところへ行って見せてもらわなければ分かりませんが、パウロたちの推薦状は人々に広く公開されています。誰でもそれを見ることができますし、すべての人の前に明らかにされているものです。

さらにパウロは 3 節で、あなたがたは「キリストの手紙である」と言います。この「手紙」と訳されている言葉は、2 節で「推薦状」と訳された言葉と、原文のギリシャ語では同じです。コリント人たちはパウロたちの推薦状としての役割も果たしますが、より本質的にはキリストの手紙です。キリストが書いた手紙です。キリストが彼らの人生に働き、ご自身のわざを行われました。パウロたちはそのために奉仕した者たちであり、道具です。その彼らを用いてキリストがコリント人たちに救いのわざを行われました。その恵みにあずかったコリント人たちは「キリストの手紙」であると言われています。

そのキリストの手紙である彼らは「墨によってではなく生ける神の御霊によって」書き記されたと続きます。「墨によって」とあるのは、当時の推薦状は墨によって書かれたからです。しかしコリント教会は墨によってではなく、生ける神の御霊によって書かれました。また「石の板にではなく人の心の板に書き記された」ともあります。本来ここは通常の推薦状と比較して話が進められていますから、「羊皮紙ではなく」と

か「パピルスではなく」と言われるのが予想されるところです。石に推薦状を書く人はまず考えられません。しかしパウロがこう述べたのは、この後で述べようとすることがすでに彼の頭の中に入って来ているからです。「石の板」で思い起こすのはモーセの十戒です。旧約の律法のことです。一方、「人の心の板」と訳されている部分には印がついていて、欄外に直訳で「肉の心」とあります。石ではなく、肉の心に書き記されたという表現で思い起こされる聖書の言葉は何でしょうか。それはエゼキエル書 36 章 26 節の御言葉だと思います。「あなたがたに新しい心を与え、あなたがたのうちに新しい霊を与える。わたしはあなたがたのからだから石の心を取り除き、あなたがたに肉の心を与える。」　これは神が将来与えてくださる祝福を預言したものです。神はご自身の民の堅く閉じた石の心・死んだ冷たい心を、肉の心・柔らかい生きた心に変えてくださり、福音を喜んで受け入れ、その祝福に生きる者へと導いてくださる。パウロはこの御言葉を思い起こしつつ、コリント人たちはこの祝福を受けたと言っているのです。旧約から約束されてきた素晴らしい救いを、その身に受けたキリストの手紙であると。そしてその手紙が書かれるためにパウロたちは奉仕者として用いられました。ここにパウロたちが神に立てられた使徒であることが証しされていると言っているのです。コリント人たちはパウロたちを通して旧約から待ち望まれた救いにあずかっているキリストの手紙であり、同時にパウロたちの推薦状でもあるのです。

パウロはさらに 4 節以降で自分たちが持っている確信について述べます。それはキリストのゆえに、またすべてを判断される神の御前で抱いている確信です。彼は「何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません」と言います。パウロは今コリント教会を指して、彼らが自分たちの推薦状だと述べました。しかし彼はそのことを自分たちの手柄として誇っているわけではありません。「私たちの資格は神から与えられるものです」と彼は言います。もし何かができたとすれば、それはただ神に由来するということです。ただ神の恵みによるということです。神がある人に資格を与え、その人を用いて、ご自身の働きを進められるのです。

この神が私たちに「新しい契約に仕える者」となる資格を下さったとパウロは言います。まずここの「新しい契約」とは何でしょうか。これはエレミヤ書 31 章の御言葉に基づくものです。エレミヤ書 31 章 31〜34 節：「見よ、その時代が来る――主のことば――。そのとき、わたしはイスラエルの家およびユダの家と、新しい契約を結ぶ。その契約は、わたしが彼らの先祖の手を取って、エジプトの地から導き出した日に、

彼らと結んだ契約のようではない。わたしは彼らの主であったのに、彼らはわたしの契約を破った――主のことば――。これらの日の後に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこうである――主のことば――。わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。彼らはもはや、それぞれ隣人に、あるいはそれぞれ兄弟に、『主を知れ』と言って教えることはない。彼らがみな、身分の低い者から高い者まで、わたしを知るようになるからだ――主のことば――。わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ。」　エレミヤはバビロン捕囚期の預言者で、南ユダの滅亡を目の当たりにした人です。神の民はそこでみな滅ぶのか、神の民の歴史はそこで終わりになるのかと思われる危機に遭遇します。しかしこれが最後ではないとエレミヤは語りました。神はご自身の契約になお真実であられて、必ず回復の時を来たらせてくださると。それが新しい契約です。これは決してそれまでの神の契約をすべて破棄して与えられる新しい契約という意味ではありません。神はご自身の契約に真実な方として、この祝福の日を来たらせてくださるのですから、この新しい契約はそれまでの神の契約と一本につながっているものであり、その延長線上にあるものです。しかし従来のレベルをはるかに超える内容、これまで見られなかった最高レベルの祝福を与えるものですから「新しい契約」と言われています。この新しい契約の特徴として 33 節に「わたしは、わたしの律法を彼らのただ中に置き、彼らの心にこれを書き記す」とあります。これまでも律法は神の民に与えられていましたが、それは石の板として、彼らの外に置かれていました。彼らはそれを守ることができず、ついに捕囚の憂き目に遭いました。しかし神は後の日に彼らの心に律法を書き記し、彼らが心から進んでこれを行う者となるように導かれると言います。それによって「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」という昔から繰り返して言われて来た神の約束は真実に成就し、彼らは主を本当に良く知る者たちとなります。そしてこのような祝福に至るのは 34 節の最後に「わたしが彼らの不義を赦し、もはや彼らの罪を思い起こさないからだ」とあります。つまり本当の罪の赦しが与えられるからです。旧約では色々ないけにえの制度がありましたが、それらは真に罪の赦しを与えるものではありませんでした。ですからそれらは繰り返しささげられました。ささげてもささげても、それらでは不十分であることを感じさせられました。この罪の赦しはやがて与えられるまことのいけにえイエス・キリストの十字架の犠牲を通して与えられるものです。ですからイエス様は十字架前夜の最後の晩餐の席上で聖餐式を聖定された際、ルカの福音書 22 章 20 節で「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による、新

しい契約です」と言われました。

こうして今や実現した新しい契約に仕える者とされた私たちは「文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者」だとパウロは6節で言います。イエス様は十字架を経て復活した後、天に昇り、ペンテコステの日に約束の聖霊を遣わしてくださいました。この聖霊は天上のキリストと地上の私たちを結び、キリストが勝ち取ったとてつもなく大きな恵みから汲んで、それを私たちに当てはめ、適用してくださる方です。この御霊によって私たちは神の律法を喜んで守り行う者にされると、先に引用したエゼキエル書36章26節の続きの27節で、次のように言われていました。「わたしの霊をあなたがたのうちに授けて、わたしの掟に従って歩み、わたしの定めを守り行うようにする。」

そしてパウロは6節最後で「文字は殺し、御霊は生かすからです」と述べます。ここでの「文字」とは、一言で言えば旧約の律法のことです。パウロがローマ人への手紙7章12節で述べていますように、律法はもちろん良いものです。それは神のみこころを誤ることなく記した正しいものです。しかし私たち自身が罪人であるため、律法によっては断罪されるだけです。ローマ書7章10節でパウロは「それで、いのちに導くはずの戒めが、死に導くものであると分かりました」と言っています。さらに同じ7章24節で彼が「私は本当にみじめな人間です。だれがこの死のからだから、私を救い出してくれるのでしょうか」と叫んでいるように、律法だけでは私たちに死があるのみです。しかし御霊は私たちを生かし、心に書きつけられた律法を喜んで行う者となるよう私たちを造り変えてくださるお方です。ローマ書8章4節に「御霊に従って歩む私たちのうちに、律法の要求が満たされるためなのです」とありますように、私たちは御霊を受けて律法を捨てるのではなく、かえって律法に沿って歩む者とされるのです。もちろん地上にある間、完全には至りません。しかし聖霊によって喜んで神のみこころに沿って歩む者となるように造り変えられ、導かれて行くのです。この旧約から待ち望まれて来た新しい契約の祝福にコリント人たちはあずかっています。パウロたちを通してです。ここにパウロたちが新しい契約に仕える者たちとされていることの証明があるのです。彼はさらに御霊に仕える務めの栄光について、このあと語って行くこととなります。

今日の箇所から二つのことを心に留めて終わりたいと思います。一つは私たちの資

格はただ神から来るものであるということと、その資格をいただいていることは、その働きにおける具体的な実によって実証されて行くべきであるということです。これは広く適用することができると思いますが、ここで第一に考えられているのは教会の働き人のことです。人間からの推薦状も意味がなくはありません。パウロも他の人のために推薦の手紙を書きました。それは円滑な交わりのために有効ですし、誤りから守られるためにも有効でしょう。しかし人からの推薦状よりももっと大事なことは、神からの資格を与えられているのか、すなわち神からの召しを受け、そのための力も与えられているかということです。そしてそのことはその働きにおいて具体的に現されているかということです。言い換えれば人からの推薦状はなくても、確かにこの人には神によって資格が与えられている、神の推薦状があると思われるような働きをして行かなければならないということです。そのことが具体的な実に現れて行かなければならないということです。もちろんだからと言って人間の力で何とか結果を出すというのではありません。私たちの資格は神から与えられるものです。ですから神に求め、神の力によって、神に委ねられた働きができるように祈り、取り組まなければなりません。そして良き実が現れて、神にお答えできることを求めて行かなければなりません。これは広く適用することもできると思います。私たちは一人一人神からの召しを受けて、社会や家庭や教会における働きに当たっています。それが神が与えてくださった召しであるなら、神が備えてくださる力によって、神の御心にかなった働きが必ずできるはずですし、その実が結ばれるはずです。私たちはそのことを神に祈り求め、神の力によって与えられた働きに邁進し、良き実が結ばれることによって神に栄光を帰す歩みをささげてまいりたいと思います。

　またもう一つ今日の箇所から改めて思わされることは、私たちは旧約の人々が待ち望んだ新しい契約の恵みの下にあるということです。罪の赦しを確信し、柔らかい肉の心を与えられ、その心に律法を書き記され、御霊によって喜んで神の律法を守り行い、主を益々深く知る者となって行く。果たしてこの祝福の下にあることを覚えながら私たちは日々を歩んでいるでしょうか。パウロが伝えた福音に聞き続けて、この新しい契約の祝福に益々生きる者とされたいと思います。そしてこの恵みにあずかっている私たちは「キリストの手紙」であると言われていることも心に留めたいと思います。私たちはすべての人に知られ、読まれているキリストの手紙です。私たちの行くところ、どこででも読まれています。願わくは私たちが新しい契約の祝福に益々感謝して生きる者となり、その変えられた生活と言葉とをもって、キリストを周りの方々

に証しする役割を果たす者たちでありますように。そして一人でも多くの方々が、殺すのではなく私たちを生かす御霊の祝福に生かされて、神の御国が最終的な完成に至るように、そのために用いられるキリストの手紙なる教会の歩みを導かれて行きたいと思います。